

- 3面 真の伴走者になるとは
- 6面 ジェンダーの視点で憲法を生かす
- 7面 地域YWCAの歩み

The Young Women's
Christian Association

YWCA

日本YWCAの使命(ミッション)
イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する
世界の人々と共に人権・平和・環境の問題に取り組む

第31総会期主題
平和を実現する人々は幸いである—マタイによる福音書5章9節

8

AUGUST
2013

No.715

www.ywca.or.jp

- 日本YWCAビジョン2015
- (1) 非核・非暴力により平和を実現する
 - ・平和憲法をまもり、世界に広める
 - ・原発のない社会をつくる
 - ・市民レベルで東北アジアの信頼関係を築く
 - (2) 女性と子どもの権利をまもる
 - (3) 若い女性のリーダーシップを養成する



宗藤 尚三

Munetou Shousou

profile

日本基督教団牧師
広島宗教者九条の会代表
さよなら原発ヒロシマの会
運営委員

核文明のメカニズムの中で、 キリスト者として生きる

68年前のあの日あの時の衝撃は、一生忘れることはないだろう。私は18歳の時、爆心地から1・3キロメートルの自宅の2階でB129爆撃機エノラ・ゲイを眺めている時に被爆し、倒壊した家の下敷きになって重傷を受け、その後近くの日赤病院の庭まで辿り着いたが、意識を失って一日中死の灰の降る病院の庭に倒れていた。戦後の公式の調査によると、私は3000ミリシーベルト以上の放射能を浴びたことになっている。夕方、私たちは病院から追いつき、広島から4キロメートル

Stand Against Nuclear

トル離れた島の島という陸軍検疫所のある島に運ばれた。そこは最も大きなヒバクシャの避難所になり、約1万5000人の幽霊のように焼けただれた人や、男が女を見分けもつかないほど顔の腫れ上がった人たちでこった返していた。真夏であり、広い検疫所の各部屋も熱気と死臭と悪臭に蒸せていた。4日目には、5000

人分のすべての医薬品も麻酔薬もなくなり、その後は麻酔なしに手足が切断されていった。死体を焼却するため薪がなく、いつまでも

も私たちは死体と共に寝起きせざるを得なかった。近くの島から衛生兵と呼ばれる若い兵士が救援にきたが、数千の死体の処理は困難を極め、結局芋畑に沢山の穴を掘って投げ込んでいった。それでも処理できず、奥行20メートルの防空壕の中に死体を詰め込んでいった。衛生兵たちは死体を粗大ゴミのように無感情に投げ込んでいった。もし、人間らしい喜怒哀楽の

情をもって作業をしたら、自分自身が精神的に狂ってしまっただろう。人はアパテイア(人間性喪失)という状態に陥ることがあるが、それは人間としての自己保存の本能の一種といえよう。検疫所は、まさに人間的な感情を持って生きていけないような、アパシー(感情の欠如)の地獄だったと思う。

戦後、私は原爆症になり、急性白血病やいわゆる原爆ぶらぶら病にかかって苦しんだ。その後、私はなぜ自分は生きているのか、自分の人生の目的は何なのか、という人生の問題に直面し、さまざまな思想的遍歴を経て、最終的には叔父の倉田百三に導かれてキリスト教に出会い、自分の生涯は牧師として平和の福音を宣べ伝え、被爆の証人になり、世界の平和の道具として働くことである、という確信を持つようになった。

被爆牧師として、私は世界各国で被爆証言と反核運動に参加してきたが、その原点は原爆慰霊碑の碑文、「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませぬから」の言葉にあったように思う。「過ち」とは言うまでもなく、日本の軍国主

義のアジア侵略であり、朝鮮を植民地支配した罪である。原爆投下の遠因には日本自身の侵略戦争があり、私たちは被害者である前に加害者であった、ということをもま

ず確認しなくてはならないだろう。その反省なしに、私たちに平和を語る資格はない。その根拠に立つて、私たちは戦後、日本国憲法の平和主義を承認したのである。

その憲法を変え、悪用しようとする政府および政権政党が、再び同じ「過ち」を犯す危険な道を歩みつつあることに対し強く抗議しなくてはならない。彼らは「自衛」という大義名分によって、核の所有も必要だと言い始めている。日本は現在、原爆の核燃料の再処理によって生み出された、軍事転用も可能な約45トンのプルトニウムを保有しているが、それは長崎型原爆5000発分に相当している。原爆と原爆はコインの表裏であって、「核抑止力」という安全神話」という名目のもとに、いつ軍事転用されても不思議ではない。

1945年8月6日、B-29爆撃機エノラ・ゲイに先行して広島に飛来し、広島気象状況を観測し



て「原爆投下」の指令を出した、

気象観測機ストリートフラッシュ号の機長クロード・イーザリーは、後日ヒロシマの惨劇を知り、良心の苦悩のために精神的異常を起し、米軍の精神病棟に強制収容された。そこで彼は自分の苦悩をユダヤ人の哲学者ギュンター・アンデルスに告げ、その往復書簡が世界各国の言語に翻訳されて大きな反響を呼んだ。そして、それを読んだイギリスの哲学者、バートランド・ラッセルは、こう感想を述べている。「もしもこの手紙を書いた人間が狂人だというならば、'がりに余(私)の晩年を精神病院で送ることになったとしても、

余(私)はあえておどろきはしないであろう。なぜならば、余(私)はそこで、人間的な感情を持った人びとの仲間入りができるであろうから」(*)と。

核文明の巨大なメカニズムの中においては、私たちは一人の人間としての責任を問うことの困難な一本のネジ釘のような存在ではないかも知れない。つまり人間としての良心や倫理は、オフ・リミッツ状態(立ち入り禁止区域)に置かれている。そのような時代であればこそ、私たちキリスト者は、禁断の木の実を食べて神から身を隠そうとしたアダムとイブに対して「(創世記3章9節)、また、道を示して欲しいと神に請うモーセに対して「わたしの前に立ちなさい」(出エジプト記34章2節)と告げられた言葉を、生活のすべてにおいてしっかりと受け止め、たとえイーザリーのようにこの世の人々から異常な人間だと言われようと、はつきりとNOを言える人間になりたいものだ。

(*)『ヒロシマわが罪(罰)

原爆パイロットの苦悩の手紙』より

「平和を表現する 沖縄から問われて」

吉田 智里

2012年9月、米軍の欠陥機オスプレイの配備に抗議し、普天間基地のゲートを市民が非暴力の座り込みで封鎖した。私も沖縄の友人と共に座り込んだ。暴力的に排除しようとする警官隊と対立させられる市民。どちらも沖縄県民だ。フェンスの向こうには、その様子を時に笑いながら眺める若い米兵たち。そこには、オスプレイ配備を言う日米の責任者は不在で、本土のほとんどの人は今起こっていること、沖縄の人たちをここまで追い込んでいくことも知らない。その「構図」を強烈に見せつけられた私は、隣の人と腕を組み、怒号が渦巻く中、大声をあげ泣きながらそこに座り込むしかなかった。とにかく、今の状況を引き受けないと、と思った。

体を張って真っ先に座り込んだのは、戦中や戦後の占領下を生きてきた沖縄の先輩たちだった。幼少期の戦争の記憶、親から語り継がれる戦争の追体験を通して、深い痛みと共に「平和」が心身に刻まれている。一緒に座ろうと若い警官に語りかける眼差し、米兵に訴えかける英語のメッセージ、人を温める歌や音楽。緊迫した状況でも「戦争につながるあらゆるものを拒否する」という在り方を鮮明に表現し、徹底した非暴力不服従を貫く先輩方と連なる若者の姿…。私は平和の宝を見たような思いだった。沖縄の人たちを踏みつけてきた本土に暮らす私に、一体何が語れるのか。途方に暮れそうになりながらも、そのことに向き合い、自分が今いる場所で、自分のやり方で平和を表現し続けていこうと思うようになった。座り込みながら問われたのは、何よりも自分の在り方だ。沖縄で出会った人たちの存在が、私の平和の源になっている。

(大阪YWCA会員)

東日本大震災
被災者
支援事業



真の伴走者になるとは

セカンドハウスについて、 ドイツで報告してきました

今年2月12日(火)〜15日(金)、日本キリスト教協議会(NCC)ドイツ教会関係委員会が主催する、「日独教会協議会」(於:ハンブルグ)に、日本YWCA被災者支援事業セカンドハウス担当として参加し、2011年3月11日からの、この2年間の日本YWCAセカンドハウス^(*)についての報告をさせていただいた。本来ならこの会議への出席のみだったが、フランクフルト在住のマーティン・レップ牧師(1995年の阪神淡路大震災時に、神戸YWCA被災者救援センターで活動)が、協議会への私の参加を知り、フランクフルトとケルンの教会でも活動報告をする機会を設定してくださった。

今回の訪問で、どれだけ多くのドイツの方々が、またドイツ在住の日本人が、福島やその近隣県の人たちのことを心配し、気にかけてくださっているかがわかった。インターネットの情報もよくチェックしておられ、「国外だからこそ言えることがある。私たちが声をあげて日本政府に外圧をかけなきゃね!」と言ってくださる方は一人や二人ではなかった。ある集会では、

報告会の場ですぐ献金を募り、5万円近い支援金を捧げてくださった。その反応、感度の鋭さは、さすが脱原発先進国であり、チエルノブイリの痛みを間近で感じてきた方々だと感じた。

私にとって今回の報告は、その事前準備から当日の報告、その後の質疑応答、食事の会話に至るまで、自分が携わってきた活動を俯瞰^{かたん}し再確認する作業だった。そのうえ報告場所が海外であったことから、ドイツから見れば日本全体が「福島」に見えるのだとも知った。いろいろなとの会話の中で「将来、福島の子どもは必ず病気になる」と言われたりすると、日本で感じたことのない痛みを覚え、はつとした。私を含む県外の人間の発言によって、日々、小さく傷つくという福島の人たちの気持ちを、ほん



函館・福島・神戸YWCAからのバナー類を
Japan-Fukushima-Frankfurt (JFF)の方たちに寄贈
(筆者:右から2人目)

Fukushima

Frankfurt

の少し理解したように思った。

今回、ドイツで報告するにあたり、福島県内の放射能被災下で起きていることをいかに伝えるか悩んだ。当事者でもなく、放射線の専門家でもない私が話せることは、セカンドハウスを通

して出会った方たちの「声」だけだった。国が、東京電力が、そして私たちの無関心が、福島や近隣県の人たちの暮らしや人生をいかに破壊したか。足場が崩れていくようなシヨック、落胆、怒り、叫び、孤独…しかしそのような中であっても、地域の人たちのために動くこととする人、職場や地域での孤立の中でも放射能の危険を発信し続ける人、ユーモアの心を忘れない人、自分にとつての幸せの形を考えに考え抜いて避難地から福島に戻る人。一人ひとりの人生の選択の傍らに立ちながら、いのちの光を見るような思いだった。そんな方たちのことを思って、報告原稿を書いた。

3ヶ所の報告会の中で、ある場所では報告後、たくさんの方に励ましのこたばをいただき、「ドイツの団体は、チエルノブイリでの保養プログラムの経験もあるから、交流してみたらどうか」など、積極的なアドバイスもいただいた。ある方は「放射能と被災に関する現状報告はあっても、一般の人たちの声を紹介される事は少ない。とても印象的な報告だった」と言ってく



Fukushima
.....
Frankfurt

さった。その一方である集会では、「何を生ぬるいことを言っているのか」と言う聴衆に、詰め寄られる場面もあった。ある人たちにとっては、汚染地帯に戻る人を見送ることなど、到底理解できないことなのかもしれない。セカンドハウスを利用する方々の多

くは、その場所が汚染されているとわかっていても「留まる」という選択をした(せざるを得ない)人たちだ。その理由は一様ではなく、まさに一人ひとりの人生そのもので、だからこそ、どこまでもこの人たちの選択に寄り添っていかねば…と思う。YWCAは「放射能」ではなく、「人間」に目を注ぎ、関わっていく団体だと思うから。しかし一方でいつも迷う。「このままでいいのだろうか」と。実際に放射能の下で生活すらしていない私がセカンドハウスのコーディネートを担当し続けることは、福島に生きざるを得ない状況を肯定する欺瞞のように見えるかもしれない。福島やその近隣県に生きる人たちの真の伴走者になるとはどういうことなのか。考えながら、迷いながら、またこの一年もセカンドハウスを行って行く。

**日本YWCA被災者支援事業
セカンドハウス担当 西本玲子**

Second house program
*(日本YWCAが2011年3月11日の地震発生後間もなく開始した、避難のための住居提供事業。)

種

主の前に大きな強い風が吹き、山を裂き、岩を砕いた。しかし主は風の中におられなかった。風の後に地震があったが、地震の中にも主はおられなかった。地震の後に火があったが、火の中にも主はおられなかった。火の後に静かな細い声が聞こえた。

(列王紀上19章11-12節)

大切な声を聞くために、派手なことに惑わされず、小さな声にも耳を澄ます者でありたいと思います。

しかし言わなければならないことを言う時には、小さな声では困ります。聞こえやすい大きな声で、はっきりと口を開かなくてはなりません。確信に満ちている時、私たちは叫ぶのだと言った人がいました。力強い声、意志に満ちた声をもって語りたいといつも願っています。

その上で思い出すこともあります。遠い昔、神学校で学んでいた時、自分の声の細さに悩んだことがありました。将来もしも教会で話をする身になれば、この声では何も伝わらないのではと思いました。相談に乗って頂いた先生は、響き渡るような豊かな声の持ち主でした。小さな私の悩みに対して、こんな風に答えてくださいました。「まあ、教会がもう少し、女性の声に慣れることですね。」

その時の衝撃を、忘れません。

北中晶子
国際基督教大学教会牧師